

Title	松本通晴編『地域生活の社会学』 間場寿一編『地域政治の社会学』 井上俊編『地域文化の社会学』
Sub Title	Michiharu Matsumoto, ed., "Sociology of community life" Juichi Aiba, ed., "Sociology of community politics" Shun Inoue, ed., "Sociology of community culture"
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1984
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.57, No.7 (1984. 7) ,p.101- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19840728-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

松本通晴編 『地域生活の社会学』
間場寿一編 『地域政治の社会学』
井上俊編 『地域文化の社会学』

(一)

地域社会研究の現状と展望については、さまざまな角度から検討が加えられている。従来からの農村社会学、都市社会学の研究の延長線上では、必ずしも明らかにできない問題が出現してきたからでもある。例えば、過疎―過密の問題は、単に人口の移動や密度の問題であるばかりではなく、地域社会の生活過程や生活構造に対する深刻な問題を投げかけているのである。

また、大都市近郊の市街地化、都市化だけにとどまらず、農・山・漁村にまで浸透してきた都市的生活様式の深化は、まさに、全体的都市化、都市化社会の到来を告げている。さらに、こうした地域社会の変動は、政治・経済・文化などの局面においても、さまざまな変化をもたらしてきている。地域主義、行政の

広域化、地域紛争や住民運動、定住圏構想やテクノ・ポリス計画、また文化行政や地方の文化の見直しなど、最近の地域社会をめぐる動きは、農村社会学・都市社会学の枠を超えた、新しい地域社会学の設定を要請しているように思われる。

今回とりあげた松本通晴編『地域生活の社会学』、間場寿一編『地域政治の社会学』、井上俊編『地域文化の社会学』の三著は、このような課題に対して、京都大学出身者を中心に関西在住の地域研究者が多数参加した地域研究三部作である。この企画は、もともと松本氏と間場氏、それに居安正氏を加えた三氏によって立案され、「地域生活」「地域政治」「地域文化」の問題を、一書にまとめて体系化を図るよう構想されたが、いくつかの事情から、それぞれ独立の体裁をとる三冊の本がつけられたようである。そこで、この紹介と批評においては、三冊を通してとりあげることにした。したがって細部に渡る紹介はできないが、それぞれの内容と同時に地域社会研究の現状と展望を三著をつなぐ糸として見定めていきたいと考えている。まず、三冊の章立てと執筆者を一覧しておく。

松本通晴編『地域生活の社会学』

序章 地域と生活

第1章 村の社会

第2章 都市の社会

第3章 広域の社会

松本通晴

北原 淳

石川 実

山本剛郎

第4章	地域の構造	長谷川善計・材木和雄
第5章	地域生活の再編と再生	鳥越皓之
第6章	地域調査の歴史と方法	中野正大
間場寿一編『地域政治の社会学』		
序章	地域社会と政治	間場寿一
第1章	生活意識と政治意識	会田 彰
第2章	地域組織と選挙	居安 正
第3章	地方政治家と政策過程―首長と議会の関係―	依田 博
第4章	住民運動と参加	丸山定巳
第5章	地域開発と環境保全	中道 実
第6章	地域政治研究の回顧と展望―「政策決定と行政」の問題を中心として―	筒井清忠
井上俊編『地域文化の社会学』		
序章	地域の文化	井上 俊
第1章	民俗と風俗	井上忠司
第2章	祭りと共同体	上野千鶴子
第3章	地域の信仰―苦難からの撤退と固有信仰―	大村英昭
第4章	流行とレジャー	池井 望
第5章	コミュニケーションと地域文化―移民文化研究	

を手がかりに―

第6章 地域文化の創造

田村紀雄

I 美術館の誕生

富永茂樹

II 故郷喪失者の文化形成

渡辺 潤

以上のような構成からもわかるように、地域社会をめぐるさまざまな問題にそれぞれの視角からアプローチされており、共同研究の利点が生かされているように思われる。そこで、以下ではそれぞれの著書から、いくつかの章をとり出して紹介と批評を述べることにしよう。

(一)

まず、松本通晴編『地域生活の社会学』はこれら地域研究三部作全体の基調をなす部分とも言えよう。章立てからもわかる通り、まず「地域の人口変動」を基底に、農村・都市と地域生活全般を俯瞰し、村の社会と都市の社会をそれぞれの章に分けて検討し、さらに広域生活や地域社会の産業構造や階層構造・権力構造などの地域の構造にも触れられている。そして、地域生活の変化の側面を再編と再生という過程でとらえ、最後に地域調査の歴史と方法について社会調査史の観点からとり上げられているわけである。

「序章 地域と生活」において、松本は戦前の農村と都市、戦後の農村と都市の論点を整理しながら、農村と都市の関係は、単に二分法 (dichotomy) と見るか、連続説 (continuum) と見る

かだけの議論ではなく、それぞれの国の資本主義の発展段階が規定するところも大きく、したがってきわめて歴史的な事柄なのである、と指摘している。そして、これらの議論を踏まえながら、今日新しく都市と農村の関係を統合させた地域社会の概念を検討していく。まず、地域社会概念の三つの系譜として、

(1)「地方史」研究の中に流れている地方(地域)の思想、(2)地域を資本と行政によって策定され、区画化された支配の単位としてみる立場、(3)地域を生活する住民の視座から規定する立場をあげている(六―七頁)。そして、「本書は、右の第三の視角に立って論述をくみたてているが、それでも当然、その他の立場の地域概念を汲みとっている。」(八頁)と基本的な立場を明らかにしている。後半においては、地域生活の変動をとらえる上で重要な指標である人口変動を、戦前(一九二〇―四〇年)と戦後(一九六〇―八〇年)に分け、行政上の市町村の単位で連続してとれる国勢調査の人口統計から地域の人口変動をとらえている。それによると、戦前の地域の人口変動についても、「郡部人口の増減は全国を二分し、東日本においては増加し、西日本においては減少するという対照的な在り方を示していた。」(一頁)点や「市部の人口は全国のすべての都道府県において増加している。このうち四分の三の府県が二〇年間に倍増している。」(一頁)などの興味深い指摘があるが、戦後の行政村、行政町、行政都市の人口変動を概観して、松本は以下の二つの点の特徴としてあげている。「一つは一九六〇年を基準として、人口減少

の市町村と、人口増加の市町村とがあることであった。

そして人口減少の町村にはほとんどどの町村が含まれ、人口増加には中規模以上の都市のほとんどが含まれていた。第二には行政市町村のそれぞれにおいても内部でいくつかのタイプが区別され、そのことが地域差といちじるしく相関していた。このようにみると、戦後の日本の地域生活が人口増加と減少の両極に分解して、いかにそのことが中央の経済や政治や文化の圧迫とかわり、それによっていづれの地域の生活もその生活の営為が無視され、または否定の対象とされてきたかがわかる。」(二七―二八頁)

このように「序章」では、地域と生活に関する論点と、人口変動という基礎的な実証的データの双方から、地域生活をとらえる基本的な視座を明らかにしているわけであるが、先にあげた地域概念の特に第三の視角と人口変動とのかかり合いについての考察が必要ではないかと思われる。つまり、地域を生活する住民の視座から規定する場合、行政市町村を単位とする人口変動だけではなく、首都圏、関西圏、中京圏などの広域圏や、年齢別人口構成、性比などの問題も見逃がせないデータとなると思われる。また、これは他の章の内容にもかかわることではあるが、ここで指摘された過疎―過密の地域的差異、特に戦前までさかのぼった歴史的過程を踏まえた上で、地域生活のさまざまな局面での地域差に着目する必要があるように思われる。地域の産業構造や階層構造なども、都市類型、地域類型を

検討した上で、地域生活構造との関連で再考察されるべき課題ではないかと考えられる。

次に「第2章 都市の社会」を見ていくことにしよう。石川美は「都市の定義と都市本質論」というひどくやっかいな二つの難問からはじめている。「この二つは「都市とは何か」「都市の本質がわかれば答えられる」↓「では都市の本質とは何か（あるいは、都市の本質はどのようにして知ることができるか）↓「都市を説明すればわかるだろう」↓「ではその都市とは？」と、連続と

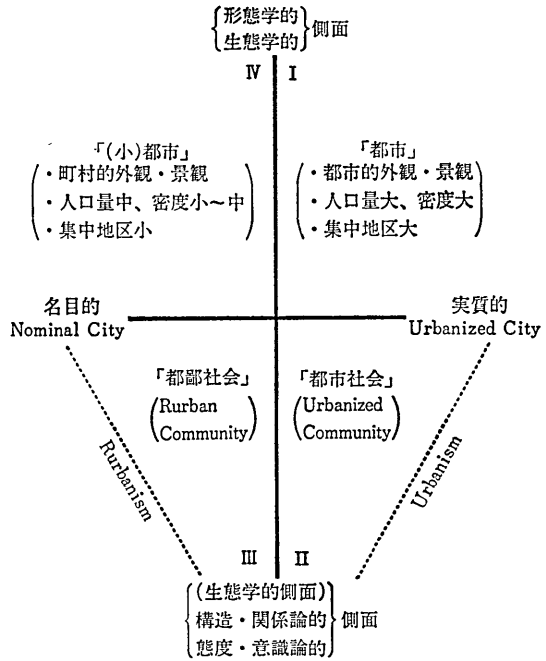


図2-1 広義の都市概念内包

続くトートロジカルな連鎖をなしている。(六二頁)この難問から出発して、二つの都市概念、ワースのアーバニズム論、独立変数としての都市と従属変数としての都市社会など馴染み深い議論を整理している。そして、「都市とは何か」にアプローチすることは、「まず第一に焦点を「都市社会」に絞ることを意味する」ともに、その都市社会が「どのような特性をもっているか」を説明することを意味した。(七一頁)わけである。したがって、「ここでは、対象を「産業革命以後における近代都市」(倉沢進)の社会に限定し、その限定された範囲内で近代都市社会の特性がどのようなものであるかを、一般的に把握することが狙いとなる。(七二頁)ということになる。結論として石川は、図2-1により、都市概念の整理を試み、「第1節の冒頭でとりあげたのは、縦の軸を規準にして、形態学的・生態学的に規定された「都市」と生態学的、構造・関係論的および態度・意識論的な三側面から構成される「都市社会」との違いであった。これに次いで、先ほどとりあげようとしたのは横の法制軸あるいは統計軸を規準にして見た「都市」概念の中身の違いであった。本章で、「真の」「都市」とか「都市社会」と呼ぶのは、あくまでも図2-1における右側のI、IIの区別にはかならない。しかも、第1節で述べてきたのは、Iの「都市」がIIの「都市社会」の基本的変数となるということであった。」

(七五―七六頁)とされている。これらの広義の都市概念内包の意味するところは、おそらく都市を人口量や人口密度、市街地などの形態的側面だけで見る見方や、逆に都市的生活様式、都市的意識などの相互作用や社会関係だけで都市をとらえようとする見方の両方に対して、ある限界を提示しながら総合しようを試みたものであろう。後半では、都市社会におけるアーバンイズム、日本の都市社会の特性、都市社会一般に見られる意識・態度論的存在についても言及されているが、都市概念の位置づけと都市社会、アーバンイズム、都市的生活様式の議論は都市社会学の中でも最も重要な問題である。一つだけ疑問点をあげておくと、都市を生態学的、構造・関係論のおよび態度・意識論的な三側面からとらえる「都市社会」の概念は、当然、全体社会の都市化、都市化社会の議論とも関連してくるものと思われるが、都市と国家、政治・経済構造と都市との関係はどのような都市概念を必要としているかという問題が残っているように思われる。

最後に「第6章 地域調査の歴史と方法」をとりあげてみよう。中野正大はP・H・マンの“Methods of Sociological Enquiry”（邦訳は『社会調査を学ぶ人のために』世界思想社）を訳している点からも、社会調査、地域調査の論点をよく整理している。まず、地域調査の小史として、チャールズ・ブリスのロンドン調査、ロウントリのヨーク調査、シカゴ学派、リンド夫妻やウォーナーらの地域社会調査をあげている。次に、地域調査の性格と

して中野は、次の三点をあげている。(1)対象として取り上げるコミュニティは、一般に、比較的小規模である。(2)一般に、地域調査は「仮説」の検証にかかわるといふよりも、むしろ「一つの社会的単位であるコミュニティの全生活過程ないしはある側面をそれがおかれた社会的文脈のなかにおいて詳細に記述する」(安田三郎『社会調査ハンドブック』有斐閣、一九六〇年)、いわゆるモノグラフ的調査の形をとることが多い。(3)データの収集に際して、観察法・面接法・質問紙法・文献資料分析・生活史法・ソシオメトリー・内容分析などの各種の調査技法が用いられる、という特徴である(二〇〇―二〇二頁)。そこで次に、地域調査の方法として、(1)参与観察法、(2)ソーシヤル・サーヴェイ、(3)文献資料の利用、の三つの方法について、調査史や手続き、技法、長所や短所などかなり詳細に論述されている。中野は、D・E・ポプリンの指摘を借りながら、結論的に「参与観察はコミュニティを深く、詳細にとらえることができるし、ソーシヤル・サーヴェイは、コミュニティの成員の特徴や態度(意見)の定量的データの収集にむいているし、また文献資料は、過去についての唯一の情報源である」(二二五頁)というように、三つの方法のそれぞれの「持味」を生かした地域調査を提唱している。

ここでの内容は、われわれが翻訳したG・イーストホープ(川合隆男・霜野寿亮監訳)『社会調査方法史』(慶應通信、一九八二年)の文脈とも一致しており、従来の社会調査論における方法、

技法一辺倒の議論から、調査の歴史と方法の統一の把握を旨とそうとする意図は高く評価できるものと考えられる。しかし、本章でも指摘されているが、対象として取り上げられるコミュニティの規模と参与観察法や面接法の長所とは相関関係があつて、地域調査の量的把握と質的把握の問題は、歴史的にもまた現代的にももっと議論されるべき課題なのである。その点にも関連するが、中野はソーシャル・サーヴェイという用語を用いているが、これはソーシャル・リサーチという用語に対して、何らかの意味を込めて使っているのであるか。現在一般的には、ある標準化された面接調査票や質問紙を用いて、一定の調査対象者からデータを組織的に収集する方法としては、ソーシャル・リサーチ(社会調査)と呼ぶことが多い。先のイーストホープは、ブースのロンドン調査やシカゴ学派の参与観察法に基づいた調査を、現在の調査票配布・回収方式のリサーチとは異なっているという意味でサーヴェイという用語を使っている。われわれの翻訳においてもリサーチは調査と訳しているが、サーヴェイの場合は、基本的には「踏査法」と訳している。その意味でのソーシャル・サーヴェイが扱われているのであるとすると、地域調査におけるフィールドとの関係の持ち方などについても検討される必要があるように思われる。

(三)

問場寿一編『地域政治の社会学』においては、地域政治の序

論部分から、政治意識、選挙と地域組織、首長と議会との政策過程、住民運動と参加の問題、地域開発と環境保全などのいわゆる地域問題、そして最後に地域政治研究の回顧と展望を、(1)近代主義的行政学、(2)CPS理論(Community Power Structure)、(3)総合的実証主義(京都市政治の研究)、(4)政治文化論の四つの研究動向から押さえているものである。これらの中で、「第3章 地方政治家と政策過程」の依田博のみが政治学専攻で、他は政治社会学、ないし社会学専攻であり、その意味では、「政治の定義における国家優位の考え方の慣わしを逆転させ」、「対人的勢力関係を重視する定義は、このような諸制度よりも、事実上の政治過程を構成する諸要素、つまり個人、集団、制度の相互作用に注目し、政治現象を社会との関係で捉える政治社会学の視野に立脚しているといえよう。」(三三頁)つまり、「政治の世界を氷山にたとえたコーザーの言葉を借りていえば、政治学は主として、氷山の海上上の可視的部分(「国家のフォーマルな諸制度や法体系」を研究してきたのに対して、政治社会学は海面下に沈んだより大きな部分(「社会」における対立、変動に焦点を合わせ、価値や資源の配分、紛争解決といった政治の機能を社会との関連で明らかにしようとする試みである) (三三頁)ということになる。それでは、このような政治社会学の視点から、現在の地域政治の問題は、どのように見えてくるのであろうか。

ここでは、いくつかの章をとりあげて、内容の紹介と批評を述べるのではなく、この本全体の中から、地域政治の動向と政

治社会学の視点について指摘しておくことにする。第一には、「序章 地域社会と政治」（間場寿一）で簡単に触れられた「地方自治レベルにおける無所属政治の変動」は「第2章 地域組織と選挙」（居安正）において、詳細に動向が分析されている。すなわち、都市化にともなう政党化の動き、革新自治体の登場とその後の無所属首長の回復・増大の傾向、「草の根保守主義」と無競争選挙の増加などが指摘されている。そして、最近の動向と問題については、「すなわち、高度成長から安定成長への経済の転換は、従来からも三割自治と称された自治体財政の悪化をもたらし、これが従来のタイプの革新自治体を後退させるとともに、財政の立て直しを自治体の重要な課題とし、これが自治体をふたたび中央政府へ依存させることとなり、中央にパイプをもち行政手腕をもつ人材を中央官庁に仰がせることとなる」（八六頁）と述べている。しかし、居安も述べているように、地方自治は、中央権力とのたえざる緊張のもとに実現されるのであるとすれば、この現状を住民自治の観点から、どのように把握直すのか、例えば、北海道知事選挙での「勝手連」方式（一九八三年）などについても触れられるとよかったのではないかと思われる。

第二の点は、「第4章 住民運動と参加」（丸山定巳）と「第5章 地域開発と環境保全」（中道実）の相互に関係する問題であるが、地域開発計画と住民運動の問題である。確かに抵抗・要求運動から「参加」への動向も納得できるし、また地域開発計

画の中の生活空間の再生や環境保全の理念としてのアメニティの提唱も重要な指摘ではあるが、実際の地域問題、例えばむつ小川原地区や三島・沼津コンビナート反対運動などにおいて、国、行政、地方政治家、企業集団、労働組合、住民運動活動家、町内会・部落会、さまざまな住民たちが、どのように地域紛争にかかわり、どのような問題解決行動をとったのかといった地域政治の社会的関心がこの二章において総合化される必要があるのではないだろうか。つまり、運動と参加の領域に地域開発と計画の視点を入れ、地域開発と環境保全の領域に運動と参加の視点がミックスされることが望ましいものと考えられる。

最後に、『地域政治の社会学』においては、政治文化や政治意識の問題もとりあげられているし、もちろん選挙や議会と首長の政策過程の問題や運動、参加、計画の視点も盛り込まれている。総合的な実証研究としては、『京都市政治の動態——大都市政治の総合的分析——』（三宅一郎・村松峻夫編、有斐閣、一九八一年）を例に、首長、市行政職員、市会議員などのそれぞれの特質と政策決定への関与の仕方などが明らかにされている（二九八—三〇七頁）。そのような意味で地域政治の理論と実証の非常に広範な領域にまで目が向いていると言えようが、しかし、最初に述べた「海面下に沈んだより大きな部分（『社会』における対立、変動に焦点を合わせ）て考えてみると、土地問題や住宅問題、交通や公共事業などの日常的な地域政治の問題や、都市の危機、都市と国家との関係などまだまだ残された課題も数

多く存在しているものと考えられる。

(四)

井上俊編「地域文化の社会学」は、地域の文化の序論の後、

「民俗と風俗」「祭り」「宗教」「流行とレジャー」「コミュニケーション」「地域文化の創造」という六つのテーマを柱として構成されている。内容的には、全体としての体系性や一貫性には強いてこだわらず、また、伝統的な村落共同体に古くから伝わる慣習や民俗芸能などよりは、むしろ都市に比重をかけ、一種の現代文化論としても読めるように工夫されている。そこで、本書に対する紹介と批評は、まず具体的なテーマのうち、「祭り」と「コミュニケーション」をとり上げて、その後最後に「序章 地域の文化」にもどって、本書全体を見渡してみることにしよう。

「第2章 祭りと共同体」(上野千鶴子)は非常に興味深い、^{オレシナ}論争的な論文である。筆者自身も都市の祭り研究を手がけている(拙稿「都市祭礼の重層的構造―佃・月島の祭祀組織の事例研究―」『社会学評論』一三二号・一九八三年)ので、上野の論考には教えられる点が多々あった。彼女は、社会的紐帯として「選べる関係」と「選べない関係」の概念セットを用いて、「祭りを、集団帰属の選択によるアイデンティティの獲得という観点から再び定義し直せば、祭りとは、「選べない関係」を「選べる関係」へと銚直す契機であると言える。」(五五頁)としている。つまり、血

縁・地縁という「選べない関係」から、社縁(結社縁または機能縁)さらに選択縁(または象徴媒介縁・情報縁)へと都市と近代の中で社会関係が変化してきた中で、地縁の祭りは、「祭りの中で自らを選択縁化するメカニズムによってのみ、共同性の聖化を獲得することができた」(七七頁)わけである。従って、「選べない関係」を「選ばれた関係」へと転化するメカニズムこそが、聖化のメカニズムである。集団聖化の中で、人々は自己聖化を果たし、「選びとられたアイデンティティ」を獲得する。(七八頁)ということになる。このような祭りのとらえ方を基本軸として、上野は地縁の祭りを、その担い手によって、(1)伝統保存型、(2)行政主導型、(3)住民主導型(3-1 伝統再生型、3-2 新興型)、(4)非地域型の四類型を区別している(六五―七六頁)。これらの類型と前述の「地縁の選択縁化」の指摘も祭りの多元化、現代社会の多元化の相互関係として見ていくことが可能であろう。ただし、祭りの本質は、確かに「選べない関係」を「選ばれた関係」へ転化する聖化メカニズムにあるのだとしても、伝統保存型の祭りにおいて特に強調される、地縁の選び直しは単なる選択縁化と呼んでいいものであろうか。確かに、行政主導型や住民主導型やたまたまコンサートのような非地域型の祭りも増えてきているし、祭り研究もその方向へ向かって進んでいくべきなのかもしれないが、地縁を再確認する意味での「都市と祭り」の考察も必要不可欠であると思われる。

「第5章 コミュニケーションと地域文化―移民文化研究を

手がかりに」（田村紀雄）は、地域文化論を、他とは少し異なつた視角から考察している。というのは、移民文化とコミュニケーション・メディアとしての新聞を題材にして都市社会の中での地域文化を考えているからである。今までの地域生活、地域政治の研究においても、国内の地域社会を対象としているものが大半で、異文化研究や国際比較研究などは、理論や研究動向を検討する際に参照していたものが多かった。しかし、田村も本章で言及しているように、都市社会学の原点とも言えるシカゴ学派のロバート・パークは、すでに、都市の中での移民新聞研究に取り組んでいたわけである。田村はこの章の前半で、従来あまり顧みられることが少なかった社会生態学的なコミュニケーション論を取り上げて、「移民、移民コミュニティ、移民新聞などの研究は、この人間生態学の成立の前になり後になりつつ進められていった。その中心がさきのパークで、かれはヒューマン・エコロジーは「人間や制度の空間的配置」の科学であるとし、この制度の中でコミュニケーションメディアをたくに重視している。」（二五四頁）と述べている。さらに後半では著者たちの日系移民新聞研究も加えて、「移民と文化変容の理論」「エスニック・アイデンティティ」「モザイク文化論」などの議論が展開されている。移民と同化の問題を、M・ハンセンの「第三世代の復帰の法則」を鍵にして、「三世にもっとも同化が進んでいる」という数字がありながら、三世の日本への意識の中におけるUターン現象にはみるべきものが多い。（二六〇―

一六一頁）と指摘されている。そして、「人種の増嶋」という概念ではなくて、「人種のサラダ鉢」「人種のモザイク」という概念を提唱する。「この「モザイク」状の社会を、人種に限らず文化や歴史にまで広げられないだろうか。もし広げることができたら、それはアメリカという移民社会に限らず、「均一」「均斉」にみえる日本のような社会にも適用でき、そこでの地域、地方、コミュニティでの文化を考えてゆく上での重要な鍵となりうるであろう。」（二六四頁）こうした主張の下に、日本の都市の中での「もう一つの文化」の成立についても触れられているが、都市化と同化とアイデンティティの関係は非常に複雑なものであり、移民研究の中のエスニシティと都市文化、地域文化とは一概にパラレルには論じられないようにも思われる。

そこで、最後に「序章 地域の文化」（井上俊）にもどってみよう。井上は、東北出身の自分が、「人びとはどこかよそよそしく、率直でなく、斜に構えて冷笑的であるように思われた」（二頁）京都の文化に対する個人的感想から、地域の文化の重要な構成要素である、価値や行動様式について述べている。文化を、その担い手の面からみると、地域文化は、全体社会によって担われる文化のなかの「下位文化」(subculture)の一つである。しかし、都市化社会、都市的生活様式の進展にもなつて地域文化の流動化、広域化も進んでくる。「たとえば現代の大都市の文化は、そこに住んでいる人びとによって担われていると同時に、少なくとも部分的には、別の地域からそこへ通勤し

てくる人びとや、遊びにやってくる人びとなどによっても担われている。」（六頁）わけであり、「現代の地域文化について考えるためには、地域文化の担い手を住民だけに限定することなく、居住以外のさまざまな形でその地域に関与する人びとをもふくめて広くとらえることが必要だ。」（六頁）ということになる。

このような観点から、都市の文化、都市的生活様式論、ストレンジャー・インタラクション（見知らぬ人びとどうしの相互作用）の議論などが紹介、検討されていく。都市生活の中で私たちは、日常不断に、無数のストレンジャーと出会う。「ストレンジャーの世界にはストレンジャーの文化が形成される。それは、右にみたように、不関与と関与、抑制と協同の微妙なバランスのうえに成り立つ文化である。」（一八頁）このように、「ストレンジャーの文化は、都市の文化（都市的生活様式）の中核的な構成要素であり、また、程度の差はあるとしても、あらゆる都市に共通にみられる要素である。」（一八頁）と結論づける。しかし、サブカルチャーとしての地域文化の多様性についても指摘している。それは、(1)地域社会をふくむ全体社会の文化の相違に由来する多様性、(2)全体社会の文化の内部における地域ごとの多様性、(3)地域文化の内部における多様性、の三つのレベルで考えることができる。

以上のような地域の文化のとらえ方には、充分納得のいく面が多い。ストレンジャーの文化とサブカルチャーの面がぶつかり合う中で、先の移民文化やエスニック・アイデンティティの

問題なども見えてくるわけであり、地域文化の多様性は、祭りにおける選択縁化とも重なり合っているものと思われる。しかし、都市の文化の中核をストレンジャーの文化と確定できるかどうか、もちろんその面は否定できないにしても、都市における昼の顔と夜の顔という二面性や定住地としての都市、漂流地としての都市という両面性が常に存在するように思われる。都市の文化を語ることは、都市そのものを語ることに同じように難しいとも言える。しかし、地域の文化を考える上で避けては通れない問題であろう。

(五)

地域社会研究にも、それぞれの時代を反映した影響が現われる。都市社会学における人間生態学的方法の導入の時期、都市社会病理現象への注目、コミュニティ論、住民運動論の展開、「共同体」の解体論争、住民自治やまち作りの動き、地域主義、地方文化、都市民俗や都市文化論、そして構造的マルクス主義を背景にした最近の *New Urban Sociology* の登場に至るまで、さまざまな動向が渦巻いているといっても過言ではない。そのような研究動向の中で、『地域生活の社会学』、『地域政治の社会学』、『地域文化の社会学』の地域研究三部作は、二三人もの豊富な執筆者によって現在の地域研究の理論と実証を総合的に網羅している著作であると言えよう。

特に、地域生活、地域政治、地域文化という三つの柱の立て

方や、各巻ごとのテーマに対する目配りも整っている。地域に對するとらえ方も、都市社会学、農村社会学の成果も中野卓編『現代社会学講座Ⅱ 地域生活の社会学』（有斐閣 一九六四年）を踏襲しながら、その後二〇年の蓄積や、政治、文化などへの広がりを見せているという意味でも重要な財産である。ただ、今後に残された課題としては、地域概念の整理や都市概念の再検討を通して、さまざまな地域社会現象（過疎―過密、都市問題、地域紛争、町内会組織、祭りや文化・宗教現象など）を具体的に取り扱い、その上で先の地域概念や都市概念の妥当性を再吟味していくという問題があげられよう。そういった意味でも、社会学者は、現代社会のあらゆる事象に対して興味と関心を持ち続ける必要がある。都市社会学、農村社会学の学説だけを把握して、地域社会の概念や枠組を考えていても現実の地域社会、都市社会は増々先へ行ってしまわないだろうか。ここ数年の都市論、例えば磯田光一『思想としての東京―近代文学史論ノ―ト』（国文社・一九七八年）、槇文彦他『見えがくれる都市』（鹿島出版会・一九八〇年）小木新造『東京庶民生活史研究』（日本放送出版協会・一九七九年）、前田愛『都市空間のなかの文学』（筑摩書房・一九八二年）、藤森照信『明治の東京計画』（岩波書店・一九八二年）、藤原新也『東京漂流』（情報センター出版局・一九八三年）などの大都市・東京をとらえる視点も都市社会学者、地域社会研究者が採り入れるべき点であるように思われる。現実の地域社会は、まさに時々刻々、動いているのである。

『地域生活の社会学』

（二二九頁・一九八三年一月・世界思想社・一六〇〇円）

『地域政治の社会学』

（二二七頁・一九八三年一月・世界思想社・一六〇〇円）

『地域文化の社会学』

（二二二頁・一九八四年二月・世界思想社・一六〇〇円）

有末 賢